

## 学生時代と図書館 54

—大学図書館の思い出—

由井 紀久子

私は4つの大学で学生として過ごしたが、それぞれの大学の図書館にはそれぞれの思い出がある。

大学生になってからは、宿題やレポートの調べものをするための場所として図書館が機能していたのはもちろんである。もう一つ、一人で物思いに耽ったり本を読んだりして、自分の心の世界を旅するための時間と空間を提供する機能も図書館にはあったように思う。先日同窓会の幹事をした折、一番思い出に残るキャンパスの場所はどこか同級生に尋ねたところ、広々とした気持ちのいいグラウンドに続いて、図書館が第2位に上がっていた。みんな似たような印象を図書館に持っていたのかもしれない。図書館の中に各自お気に入りの場所を持っていて、あの安楽椅子が好きだったとか、あの席がお気に入りだったとか、あの机のランプが懐かしいとか、思い出話に花が咲いた。友達と一緒に運動をしたりお弁当を食べたりする場所であった芝生のグラウンドとともに、自分の心を一人静かに解放するための場所でもあった図書館は、卒業後何十年経っても大切な思い出の場所であり続けるのだろう。

調べもので図書館を使ったときには、ただ読みたい本を読むためだけに使っていた高校生のときとは違い、貴重な資料に直接触れることができた。そのことがいい思い出として心に残っている。当時英語を専攻していたので、『カンタベリー物語』（G. チョーサー）の語釈をするためにある資料を調べるような宿題が出されていたのだが、その資料を使うときはカウンターの引き出しから司書の方が大切そうに取り出して渡してくれた。こちらも恭しくそれを受け取り、宿題をしていたことを思い出す。大切な古書資料を学生に直に使わせようと計らってくださった先生にも感謝している。

当時はまだコンピュータが図書館に導入されて

いなくて、調べものと言え  
ばすべて目録カードで検索  
していた。目当ての文献情  
報が出てきたときのちょっ  
とした喜びの感情は、カー  
ドをめくっていくときの手  
触りや独特のにおいととも  
に記憶に残っている。一つ  
一つ手でノートに書誌情報  
を書き写していたのだから  
、今から思えば能率が悪い  
ということになるのだろう  
が、その分個人の記憶にし  
っかりと刻まれているよう  
にも思う。

大学院生になってからは、書庫に入って文献を探ることが多くなった。日本で通った2つの大学の図書館の書庫は基本的に閉架式で、院生以上は手続きをした上で入ることができるものだった。留学先のオーストラリアのクィーンズランド大学の図書館は、市民も学生も簡便な手続きで書庫に出入りできるシステムだった。日本の書庫は、コンクリートの壁に囲まれ、可動式書架が所狭しと並んでいるひんやりとする空間だが、オーストラリアの書庫は、土地が広いということもあって、明るく広々としたスペースだった。閉塞感がない分、長時間書庫内をうろうろするのも楽であったと思う。ここで研究についてあれこれ考えを巡らせていた。書架に思いがけない本を見つけては思考が広がっていくような感じを抱いたこともあったし、研究についての漠然とした夢を持つこともできたし、心地よい思い出に包まれている。

オーストラリアの大学には、本館や理工系の図書館などのほかに、学部生専用の図書館があり、入り口では図書館職員さんの顔写真が出迎えてくれていた。授業用の論文の抜き刷りのファイルや期末試験の過去問題のファイルが開架式書棚に置いてあるなど、日本の大学図書館ではあまり見かけないものもあった。この図書館の空気は本館の空気とは違い、宿題や試験勉強に追われる学部生のエネルギーが満ちていたように思う。

上述のように、私の図書館の思い出は振り返ってみると、いつも心地よい感情とともにあるのである。

ゆい きくこ（助教授・日本語教育学）

